

## 首長の墓

3世紀後半、『魏志倭人伝』によると、卓弥呼の墓として径百尋の塚を築いたと描かれています。最古の定型化した古墳として奈良県桜井市箸墓古墳が考えられており、大和・河内・播磨・吉備などの連合政権が、その象徴として築かれた古墳とも言われています。

古墳は民衆の墓とは隔絶したもので、首長の墓として全国一斉に造られるようになります。古墳は古墳社会を主導したヤマト政権との関わりの深さによって、その墳形が前方後円墳であるのか、円墳・方墳であるのかが決まったと考えられています。その表面を飾る葺石や埴輪の有無、埋葬施設が割竹形石棺か木棺か、といったこともヤマト政権との関係で決められたと考えられています。自由に大きさ・形・埋葬方法を定めることができるというものではありませんでした。

京都府北部の丹後半島では、京丹后市神明山古墳や同網野銚子山古墳など、100 m以上を測る大型の古墳が5世紀前半までに造られますが、5世紀後半以降、100 mを超える前方後円墳は造られな



日本海に面して造られた網野銚子山古墳(京丹后市教育委員会提供)

くなります。ヤマト政権が日本海の対岸にある大陸を意識して、大規模な古墳を造らせましたが、5世紀中ごろにはその役割が終わり、大型の古墳を造る必要がなくなったためとも言われています。

京都府南部では、大型の古墳である木津川市椿井大塚山古墳や向日市元稲荷古墳が3世紀の間に造られますが、椿井大塚山古墳に続く4世紀後半になると、100 mを測る前方後円墳は造られません。数本の中小河川で区分される小地域ごとに、中規模な前方後円墳や前方後方墳が造られるようになります。



粘土で覆われた棺（瓦谷1号墳）

木津川市<sup>かわらだに</sup>瓦谷1号墳は、旧木津町域を生産基盤とした集団の長が、古墳社会を主導するヤマト政権に自らの支配権を承認してもらった証に造られた墓です。この古墳は、段築と葺石をもたない全長51 mの前方後円墳で、後円部の中心に長大な埋葬施設が2基ありました。棺は<sup>く</sup>剥り抜き式の木棺を多量の粘土でくるんだ<sup>まいそう</sup>粘土槨と、粘土による密封が見られない長大な箱形木棺が、主軸を南北方向に揃えて並んでいます。棺の長さとともに7 mを超え、内部を仕切板で3つの空間に分け、中央の空間に人を葬っていました。

棺の内外から、銅鏡・武具・武器・<sup>たてぐし</sup>豎櫛・ガラス玉などの多様な<sup>ふくそうひん</sup>副葬品が出土しました。なかでも、列島内ではまだ定式化していない鉄製の甲冑や、40本を一束にして容器（<sup>ゆぎ</sup>靱）に納められた状態の鉄製・銅製の鏃などは注目されます。1号墳の周辺には1号墳に従属したかのように、埴輪を利用した棺（埴輪棺）が多数あります。この棺に使った埴輪には蓋形埴輪・盾形埴輪のほか、棺に使用するために作られた特殊な埴輪が使われていました。1号墳の豊富な副葬品や埴輪から、旧木津町の地域を生産基盤とした集団の首長墓であることが想像できます。（伊賀高弘）